

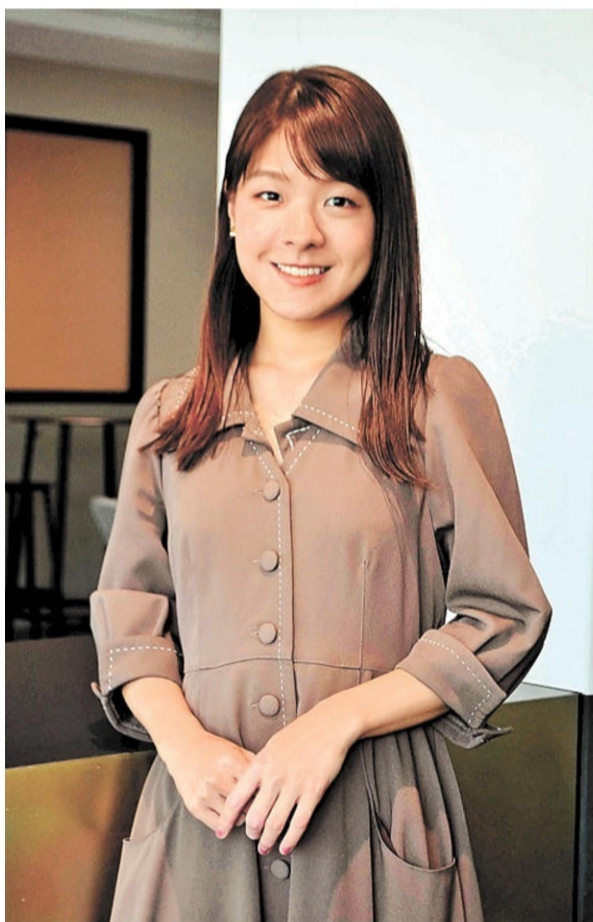
バイオリニスト 廣津留すみれさん 岐阜市で公演へ

米国の名門、ハーバード大とジュリアード音楽院(修士)を首席で卒業、多方面で活躍するバイオリニストの廣津留すみれさん(30)の「岐阜新聞社・岐阜放送プレミアムコンサート 廣津留すみれトーク&ヴァイオリン・リサイタル」が、来年1月14日に岐阜市美江寺町の岐阜市民会館で開かれる。公演に先立ち、廣津留さんが来場者に伝えたいメッセージを語った。

廣津留さんは大分市出身で高校時代に米国のカーネギーホールでソロデビュー、共作したアルバムが昨年のグラミー賞にノミネートされた。リサイタルでは、ビバルディの「冬」やショーンソンの「詩曲」などを、「世界へ飛び出す! 夢のかなえ方」と題したトークを挟んで演奏する。曲目について廣津留さんは「本物のクラシック音楽を聴いてほしい」と思い選んだ。良いミックスになる

音楽・学業「努力で両立」

演目「踊りたくなる曲」



と思う。踊り出したくなるようなりズミカルな曲ぞろいです」と紹介する。

トークについては、学業と音楽の両立を可能にした自身の体験が中心になる。「よく天才だからできたと言われることがあるが、私は天才じ

やない。努力です。簡単に両立できる魔法があるわけでもない。大きな目標を目指すには、まずその日の目標を設定し、実行する。その積み重ねが大事。今も続けています」と強調する。「それに音楽が好きだから、学業のため音楽を諦めることはできなかった。例えば、どちらの成績も下がらないように、時間の使い方を常に考えることが大切。誰もが一日は24時間。ただ好きなことのためな

ら、何かを犠牲にすることも。高校、大学時代ずっと睡眠不足でした」と苦笑する。

ハーバード大の入試は「高い学力は必要だが、そのためどんな努力をしたかが問われる。人間性や情熱が評価されると思う」と振り返る。大学の環境については「多様で何かに秀でた人の集まりで、互いに刺激し合う。ブラックホールを研究する人がいたが、音楽も論理的な視点が必要と気付かされた。多様な人間が集まることで視野や視点が変わる。興味がある人には海外を目指してほしい」と語った。

リサイタルにはピアノ奏者の河野紘子さんも出演する。チケットは11月18日から一般発売。問い合わせは岐阜新聞社読者事務局、電話058(257)1625。(田島豪人)

音楽と学業の両立について語る廣津留すみれさん(東京都内)

バイオリニスト・廣津留すみれさんが絵本翻訳

好きなことが「ギフト」

バイオリニストの廣津留すみれさんが、障害を乗り越えた世界最高峰のバイオリニスト、イツァーク・パールマンの少年時代を描いた絵本「イツァーク」を翻訳、「(若い人たちに)パールマンのよつに、何か好きなことを一つ続けて、と伝えたい」と話す。



絵本「イツァーク」

巨匠・パールマンの少年時代伝える

日本でもフアンの多い巨匠、パールマン。廣津留さんも出身の大分県でバイオリンを練習していた幼い頃、CDを聞き込み、少しでもその演奏に近づこうと奮闘したという。米ハーバード大を経てパールマンも教えるジュリアード音楽院で学んだ廣津留さんは「温

厚でしんが強く柔らかな、彼の性格そのものの音は、こうしてつくられたのだと改めて分かった」と話す。イスラエル生まれのパールマンは、4歳でポリオ(小児まひ)にかかった。両足に障害が残ったが、立てななくても座って弾ける、と夢を諦めず、テレビ番組での演奏をきっかけに演奏家として歩み始める。その生き方は「バイオリン愛」に貫かれていたという。走ったり自転車に乗ったりはできなくても心の中にはメロディーがあった。音楽こそが自分にしかない素晴らしい「ギフト」だと知っていた、と訳した。



「公共施設のバリアフリーなどに取り組んだパールマンのよつに、私も音楽の力を社会的な問題解決につなげたい」と話す廣津留すみれさん

国際教養大や成蹊大で教えるなど、教育にも力を入れる廣津留さん。「音楽でもスポーツでも、好きなことを続け、明日が楽しみになる」生き方を伝えたいという。受験や就職などで続けることが難しくなることもある。「(その分野で)プロにならなくても、続けてきたということが自信になり財産になると思えます」

バイオリニスト、起業家

廣津留すみれさん

ひろつるすみれ 大分市生まれ、米ハーバード大学を卒業、ジュリアード音楽院修士課程修了。国際的な演奏活動のほか、英語セミナーの開催、テレビ出演など幅広く活躍。著書に私がハーバードで学んだ世界最高の『考える力』など。



ファンレターって、送ったことありますか？ 心動

読書日和

竹下文子作 鈴木まもる絵 「みけねレストラン」



ファンレター 返事きた

かされた時や、作品を好きだなと思った時。自分の思いを作者に直接伝えられるのは、なんだかときめきますよね。

私の初めてのファンレターは、なんと幼稚園の頃。ある本を読んでとても気に入った私は、自分の気つきを直接伝えたい、とほりきを

って作者にお手紙を書きました。その本が「みけねレストラン」(竹下文子作、鈴木まもる絵、偕成社)です。

「そうぞうりょく」があれば、ただの雲もエビフライやソフトクリームに変身するなんてわくわくした、自分ももっといろんな発想をしてみたい、うきうきしながら読みました、という趣旨のお手紙を作者の竹下文子さんにお送りしました。

すると、なんと！ お返事がきたのです。まさか、猫の「すみれ」を生み出した当のご本人からお便りをいただけるとは思わず、受け取った時のうれしさは忘れられません。思い返すと、

主人公のグルメな「でぶねこ」の名前は、くしくも私と同じ「すみれ」。飼い主から「独立」してレストランビジネスを始め、近所の猫たちに大人気となり、でもやっぱり家がいわと帰ってゆく過程を夢いっぱい描いています。

同じ名前で親近感がぐっと増したこの猫が、「そうぞうりょく」を使って雲をいろんな形に「調理」して豊富なメニューを提供するお話に、幼い私は興味津々。

あれから約20年。生まれ故郷の大分を飛び出してバイオリニストになった私は、ジャンルや伝統的なキャリアパスにとらわれずに試行錯誤する日々です。この本で出会った「そうぞうりょく」を毎日駆使して頑張っています、と今なら手紙にそう書きたいです。

子ども時代から性格や猫好きなどころはあまり変わってない私ですが、すみれの作る「またたびワイン」はそろそろ飲んでも良いかなあ。